

## 博論の教訓

名古屋大学 専任助教  
松木 孝文

正直、博士論文の執筆・研究を振り返って記録に残すのは非常に気が進まない作業である。とにかく恥ばかり思い出して落ち込むこと頻りである。しかし、これから論文に取り組む院生各位の「他山の石」とするため（模範とすべき事例は他を参照して頂きたい）、また今後の自分自身への戒めとするため、精神力が続く限り回顧していきたい。

博士論文では、愛知県瀬戸市の陶磁器産業を事例として「地場産業の存続と共同性」と題する研究を行った。地場産業を対象として選択したのは、修士課程まで地場産業研究を行っており、東海地域にもまた多数の地場産業集積が存在したためである。この課題の決定についてそれほど悩んだ記憶はない。修士課程（経済学）までの関心を博士論文に引き継ごうという、今思えばこれは実に安直な決定であった。経済学的な物の考え方に、地場産業研究の選択。この一見合理的に見える選択が実は「罨」であることに気づくのは数年後のことである。その時を迎えるまで、私の頭には無意識のうちに「産業や経済のことを研究するのだから経済学的な発想が入り込むのも仕方ない」という甘えが巢食い、長く足を引っ張ることになる。

そんな安直な自分が社会学の博士課程に進んで最初に迎えた難関は「社会学とは何か」を理解するという非常に基礎的な、本来学部で理解しておくべきステップだった。大学院試験のため、社会学の古典やテキストなどは一通り読んでいたものの、実際に社会学的研究を理解するまでには長い時間を必要とした。そうした状況ならば当然、先行研究を読み込んで消化し、自分の関心を社会学的研究にするにはどうすればよいかを熟考して調査に入るべきである。しかし、どんどん先に進む周囲の院生の調査報告を聞くと焦りが募る。「遅れをとりたくない」「取り繕いたい」というどうしようもない感情から「じっとして本を読んでいても進まないの、とにかくフィールドに入って情報を集めよう」という考えが生まれ、頭を占めるようになった。自分が何を明らかにすべきか、熟考しないままフィールド調査の回数を積み上げていく日が続いた。今思えば、フィールドで多くの現実に触れれば、そのうち社会学が何か自然と分かってくるのではないかという、これまた安直な発想だったように思う。その頃は毎週、多い時は3回～4回くらいのペースで現地調査を行っていたが、実に無駄の多い調査だった。フィールドノートは急速に分厚くなっていったが、社会学的研究になっていないだけでなく、調査事項のフォーマットも揃っていないという、殆ど落書き帳に等しいものが大量生産される（おまけに字が汚いため、後で清書するとき自分の文字を「解説」する羽目に陥った）。

こうした無軌道にフィールドを歩く時期が（驚くべきことに）3年ほど続いた。もちろんこの期間に社会学について理解することも、自らの学問的課題を理解することもなかった。何よりその事実について自分自身が深刻に受け止めていないのが問題だった。フィールドでは「その社会学というのはどういう分野ですか？」などと聞かれることも多かったが、自分でも十分な実感のない暗記のみの情報で説明し、それを契機として自分自身に真剣に「社会学とは何か」と問うことはなかったと思う。この時期、自分が思考停止してい

たことは疑いない。とにかくフィールドを歩く自分に酔い、安心していたのである。「努力していればいつか辿りつける」という奇妙な信念があったが、冷静に考えてみれば根拠のない話であり、事実自分のケースにおいてはむしろマイナスの方向に作用した側面すらあった。

その後なんとか「社会学とは何か」という問いに対して自分なりの答えを出し（非常勤講義を担当してからは否応なしに考えるようになった）、概ね自分の研究を社会学的研究にするにはどうすれば良いかに見通しが付いてからも、この問題はかなりの期間尾を引くことになった。今度は自分の思い描いた「博士論文の完成図」と「手持ちのデータ」の間のギャップが問題になったのである。この場合、対応は枠組みを変えて完成図を修正するか、新たな調査を行い手持ちのデータを一新するかの対応が考えられる。自分が最初に試みたのが前者であった。これまで集めた調査データが膨大な量になり、それを元に何本かの論文を書いてしまうと、それらのデータを用いて博士論文を書くことが合理的に思えたのである。ありていに言えば「折角集めたデータがもったいない」ということである。もちろんすでに建てた家の土台を入れ替えるようなこの試みが実を結ぶことは無く、結局のところさらに大幅に調査データを追加することとなった。

その他、失敗（とそれを周囲の助けによって救われた）エピソードについては枚挙に暇が無いが、紙幅の都合上それはまた別の機会に譲りたい。一応総括として、自らの経験から教訓らしいものを挙げておきたい。

第一に、先行研究を読みこんで問いを立て、調査計画を立て、現地調査を行うという当たり前のステップを順序どおりにこなしていくこと。この場合「順序どおり」というのが重要である。取り繕うように調査だけを先に行っても論文にはつながらない。

第二に、過度に自分のこれまでやってきたことに拘泥しすぎずに方針を修正していくこと。特に周囲のアドバイスは積極的かつ柔軟に取り入れたほうがよい。追い詰められると自分では合理的な選択をしているつもりで、往々にして無謀な選択をしている。

第三に、あきらめずに継続すること。かなりの数の失敗や挫折を繰り返したものの、それでも最終的に博士論文の形にまとまった理由を挙げるとすればこの点にある。

以上、書いている間も当時思い起こされて胃が痛くなったが、これから博士論文・修士論文等に取り組まれる各位の「他山の石」となれば幸いである。

最後に、これまでご指導・ご鞭撻を頂いた先生方、色々と助けの手を差し伸べてくれた院生各位にこの場を借りて御礼を申し上げ、結びとしたい。